

## ★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

# MING MEI



MING MEI プロフィール  
1958年横浜生まれ。高校生のとき、山下幸雄主宰の「ふしぎな仲間たち」に参加。専門学校の服飾デザイン科に通いながら、おだ辰夫と「小学四年生」の読者ページ「ワイワイシヨール」を共作する。専門学校卒業後、いったんは就職するが、一年で退職。以降、フリーの服飾デザイナーとマンガ家を両立していく。「新つれづれ草」ではMING MEI名義で『横浜肉球倶楽部』を発表。マンガの元になった同名のブログもある。



イラスト：MING MEI



自分のマンガが初めて載ったとき  
それで気が済んじゃいました

初めて読んだマンガは……覚えてないですね。ただ幼稚園ぐらいのときから、絵を描くことは好きでした。可愛い猫の絵を描いたりすると、女の子どうしですごく受けたりしたので、描いていればご機嫌という子供でした。だからマンガ家というよりは、イラストレーターの資質があったんじゃないかと思います。

マンガを読み始めたのは小学生ぐらいから。まわりが読み始めたのと一緒にだったかな。そのあたりはあんまり記憶がなくて。自分で「りぼん」とか買っていて読んでいたかもしれませんが。小学校の高学年の頃は、一条ゆかりの『デザイナー』がものすごく流行っていましたね。

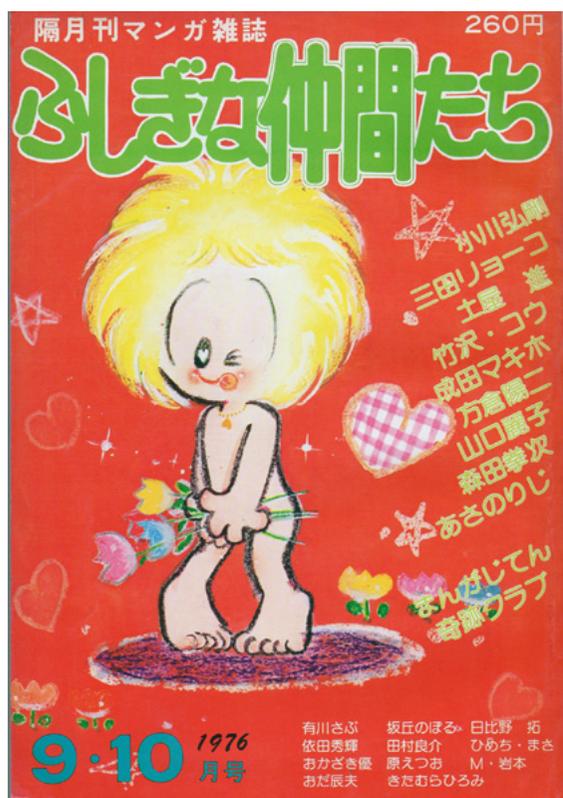
マンガ家を職業として意識するようになったの

自画像：MING MEI



「ふしぎな仲間たち」に、ひめち・まさ名義で掲載された「ハッスル! チャボちゃん」

は中学生ぐらいのときです。ちゃんと食べていけるようになるにはどうしたらいいんだろうと、リアルな方向で考えていました。高校に入って美術の先生に顧問になってもらい漫研を立ち上げました。一緒にやっていた子の友達がマンガ家を目指している人で、そのつながりで大学の漫研サークルとのつき合いができたんです。その紹介で山下幸雄さんの「ふしぎな仲間たち」とつながって、マンガを載せてもらえることになりました。ペンネームの「ひめち・



まさ」は、当時好きだった人の名前を組み合わせた。「ひめ」は、チューリップのボーカルの姫野達也くんから。「ち」は古井戸のチャボくん(仲井戸麗市)。「まさ」というのは、当時、大学のサークルにおいて私の彼氏だった「まさゆき」くんの名前から取りました。

漫研はかなり本気でやっていて、雑誌に投稿もしていたんですが、かすりもしませんでした。そんな

な状況で「ふしぎな仲間たち」に載って、横浜の有隣堂にあると聞いたから、見に行っただけです。そしてレジの隣にあるじゃないですか。「私の本が積んである！」って。正確には私の本じゃないですけど(笑)。私はそれまでマンガ家になろうと思っていて、この「ふしぎな仲間たち」を足掛かりにしようとしていたんです。でも載ったら気が済んじゃいませした。あと彼氏とは、高校1年のときからつき合っていたんですが、「ふしぎな仲間たち」に載った頃をピークに、関係が冷えてしまっただけで、高校3年の秋には別れてしまったんです。そうしたことであって、全部終わったなど。

ただ、その彼もマンガ家を目指していて。小学館に出入りしていたんですね。なぜか私を連れていってくれたときがあって、それで小学館の人とつながりができました。彼とはきれいな別れをしましたけれど、そのあと小学館の学年誌の編集さんから直

接連絡があったんです。どうやら彼が私を紹介してくれたみたいです。いい人でした(笑)。

そこで私はおだ辰夫さんと組むことになるんです。おださんの名前は高校のときから知っていて、確か女の子が読むような雑誌に軽めのギャグマンガを描かれていて。えーっ、そんな人と私が、つてびつくりしたことを覚えています。歌手の卵が、プロの歌手と一緒に歌うような感じというか。高校を卒業して、専門学校の服飾デザイン科に3年行きましたけど、そのあいだ学校と両立しながらやることになりました。



編集部に行つてすわつていと  
仕事がどんどんやつて来た

おださんと一緒に描いたマンガは、「小学四年生」の「ワイワイショー4ショー」という読者ページです。稲川あけみのペンネームでやりました。ユニークな

サッカークラブのある小学校とか、離島の小学校とか、月に二回取材に行つて、そのようすをマンガにするという。よく覚えているのは、日光に小学生のホッケーチームがあつて、そこを取材しに行つたんですが、すごく由緒あるホテルに泊まつたんです。そのホテルの入口で、見たこともない格好をした人がいて、私の荷物を持つつて言うんですよ。いや、私、一人で持てますから、と言つたことを覚えています。当時はポーターという人がいることを知らなかった(笑)。

仕事は楽しかったですね。私、社会というものはすごく厳しいところだと思つていたんですけど、メインはおださんでしたし、私は取材について行つて、小学生と遊んでいればよかつたので、気は楽でした。しかもベースの原稿はおださんが描くので、私は指定されたところに女の子のキャラクターを描くだけ。それでお金がもらえるなんて(笑)。あま

りに楽しいから、これで食べていけるんじゃないかと一瞬思ったりして。それから私もいつとき欲が出



おだ辰夫さんと「ワイワイショー4ショー」を担当していた当時の写真、「はかた」まで出張しました。



て、ほかの編集部からカットの仕事がもらえるにはどうしたらいいんだろうとおださんに聞いたら、時間のあるときになるべく編集部に来てすわってあればいいんだよ、と。それから私、学校が終わったら小学館に行つて編集部ですわっていましたね。したらあちこちから来ました。「ちよつとドラえもんのカット描いて」とか。まだあの頃は私も若くてちよつとは可愛かつたし(笑)。

それから当時、編集長だった中村桂二さんという方に、えらく可愛がっていただきました。たぶん親子ぐらい年が離れていたと思います。娘さんはいらっしゃらなかつたみたいですけど、「うちの娘だ」と言つて、あちこち連れていってもらつたりしていただきます。その中村さんが専門学校を卒業したらどうするんだと聞いてきたので、私、調子がいいから、この世界で生きていきますと。でも、その頃はおださんが「三人社」をやつていて、マンガ家さんつて

やっぱり毎月の収入は不安定なんだなと思い、とにかく力試しで会社をひとつ受けて、受からなかったら就職はやめようと思ったんです。そしたら受かつちやつた(笑)。マンガ家でも何とかなるという目論みもあつたんですが、一回ぐらい就職してもいかなと。

でもね、その会社、一年で辞めちゃいました。子供の服のデザインをやっている会社だったんですけど、売上げが達成できないと叩かれるんです。それが嫌で。お金をもらってるから、そんなこと当然なんですけどね。今思うと甘かったというか、世間知らずというか。それで、辞める前の12月頃でしたか、中村さんの顔が浮かんで電話したんです。そしたら中村さんが「今の月給はいくらだ？」と。その当時、だいたい10万で。そしたら中村さんは「わかった」と、月10万のレギュラーの仕事をお願いしました。

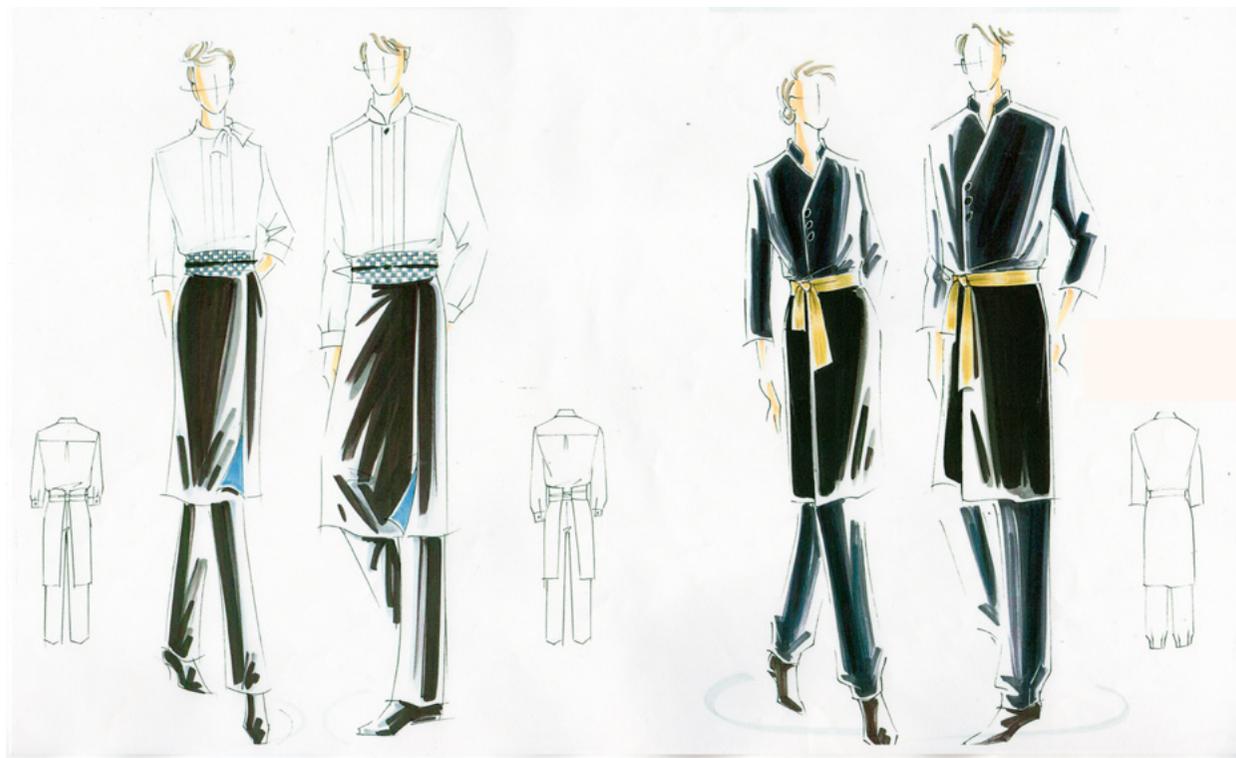


作ったものにはこだわりはない  
ただ絵を描いているのが楽しい

そうしてマンガ家に復帰したんですけど、辞めた会社で私の後釜になった人が素人同然の人で、大変なことになっているらしく、私に顧問みたいな形で戻って来ないかと。そんなこと知るかという感じだったんですけど(笑)、そこに週2回行くことになりました。そんなこんなでバブルの時期には、週に3社ぐらい行くようになりました。収入的にもすごく良くなりましたね。

でもバブルが弾けた頃から、何社もあつた得意先がひとつ減り、ふたつ減り、今はひとつになりました。マンガの方は、小学館のあちこちに顔を出していた人間関係が実つて、学年誌を始め、学校の先生が読む「教育技術」という雑誌の仕事が何年か続きました。それから赤ちゃん雑誌の読者ページをやら

マンガの時とはがらっと絵柄が違う、こんなファッションイラストも描いています。



せてもらったりしていましたが、雑誌そのものがなくなったりして、マンガでお金をもらえなくなつて10年ぐらい経ちますね。今は最後に残つたデザイン会社で仕事をしています。

その会社ではホテルやデパートの制服をデザインしています。ああいうところって、10年に一回ぐらい制服をリニューアルするんですよ。そのときにプレゼンをするので、そのデザインを担当したりしています。コンペに出して勝つか負けるかですから、博奕的な要素があるというか、けっこう楽しいですよ。毎日がギャンブラーみたいな感じ。その会社は大きな会社ではなく、大手の下請けということもあって企画だけ請け負ってくれないかという依頼があるんですね。となると、プライドのあるデザイナーはやりたがらない。自分の名前が出ませんからね。そこがどうにも我慢できない人がいるようです。でも私としては作業しているのがいちばん楽しいの

で、別にどうでもいいというか(笑)。デザイナーによつては、コンペが通つてから型紙を作つたりする人もいますが、私、デザイン以降は丸投げです。いったん相手に渡したものは、卒業した子供みたいなものですから、あとでどんなにデザインが変わつたとしても一向に気になりません。

洋服の専門学校を出ましたけど、私自身、洋服がものすごく好きでもなければ、嫌いでもないというか。食えるようになるために入ったので。洋服がものすごく好きな人と、会社に入ったときいろいろ我慢しなきゃいけない。たとえばお金がかかるからこんな素材は使えないと言われるじゃないですか。そうなる则自分の理想とは違つて辞めちゃう人もけつこういるんですよ。私の場合、そういうのは全然苦にならない。



マンガ家としてやっていけないのは  
最初から気づいていました

マンガの場合、私、注文がないと困るんです。というか描けない。マンガでずっと食べていくことをしなかつたのは、そのあたりに根つこがあると思いません。私には表現したいこととか、訴えたいものがないんです。それよりは絵を描くという作業自体が好きなんです。何かを描きたいという人は、抑えようのないほど溢れるものがあつて、それを書き留めているだけなんだろうと。それができないってことは、要するに枯渇しているわけであつて、そんな人の作つたものに価値があるのかなと。作家というものはそうあるべきだと。私はそんなタイプじゃないんです。

自分のことはリアリストだと思えます。実は、私の両親があまり仲の良くない時期がありました。

確か小学校4年か5年の頃だったと思いますけど、父親が暴れて、母親が私と5つ下の弟を連れて、近くの公園に走って逃げたことがあったんです。そのときに母親が、「あんたたちのために私はがんばるから」と。母は専業主婦だから、家を出るわけにはいかなかったんですね。そういうのを私は聞きたくないなと思って。それで妙に自立心が増して、とにかく食える女にならない限り、母のようなセリフを言わざるを得ない人になっちゃうと。だから変なところでリアリストになるんです。マンガ家を目指している人で、苦労しているのを目の当たりにしたり、プロになったとしても上から下までいるんだということがわかって、そこまでやれる自信もなかった。さらに描きたいネタもないわけだから、これじゃあ無理だろうというのが早い時点でわかっていた。まあ夢がないっていうことなんですよけど。

でも、5年前に、おださんからフェイスブックの友達申請が来て、いつのまにか「新つれづれ草」に描かせていただくようになりました。最初は描けるかなと思っていたんですけどね。こんなマンガでいいのかと、今でも思っています。「新つれづれ草」の皆さんは、私と違って、描きたくてしょうがないと思って描いていらつしやるじゃないですか。すごいなあ。これが物書きのあり方だよなあと思って見ています。

今後描きたいマンガですか？ ないです(笑)。「新つれづれ草」に何回か載ったので、気が済んじゃって足を洗おうと思ってたんです。でもこのインタビューがあるというし、山下さんが言うもんだから、今回も描きました。その先のことはよくわかりません。「新つれづれ草」は健康寿命が続くうちに出すと山下さんが言ってたので、それくらいまではつき合おうかな。

## ■インタビューを終えて

「私には描くテーマがない」とはつきり口にできるマンガ家さんはそういない気がします。でもそれがマンガを描かない理由にはならないというか。MING MEIさんの猫マンガは、「新つれづれ草」の中でも断トツの癒やしマンガだと思います。足を洗うとか言わないで、これからも長く細くマンガを描いていつていただきたいなあと。さばさばとした人柄も素敵でした。

文・中島泰司

2016年5月15日

横浜日吉駅近くの喫茶店にて



自画像：MING MEI

